

限らず)

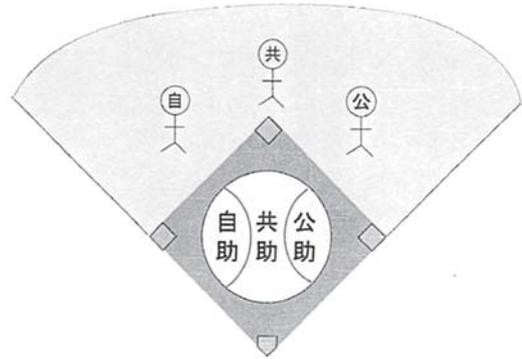
- 異世代間で組織編成、ルールや活動内容の把握  
(随時更新すること。住民間の情報共有は欠かせない)
- 連絡体制・情報伝達
- 避難場所の確認(地域把握)
- 危険箇所の確認(地域把握)
- 災害時要援護者の把握(住宅地図の有効活用)
- 訓練(救出・救護・避難など)・点検(機材・設備)
- 給食・給水
- 地域の(資源、風土、文化、特性、つながりなど)把握
- できるだけ多くの人と知り合い、情報を共有する
- 自分発の防災マップづくりから家族、自治会、小学校区、行政のへと照合すること

## ②野球方式による地域防災

よく自らの命は自らで守る「自助」、地域の中でお互いさまの助け合いの「共助」、行政が施策として行う「公助」を例えば、自助が7、公助が2、公助が1など何対何と表現することもある。確かにある意味、時系列的な役割分担を考えるとそうであるが、間違っただけで防災全てをそうだと思ってしまう市民もいる。

地域防災を野球に例えると、野球は、いくら強打者がいても打線につながりがなければ得点にならない。いい投手がいても守る野手がいないと試合にならない。それらを判定する審判や裏方のボールボーイ、チームを支えるマネージャー、応援する観衆などそれぞれの役割、立場の方々が適材適所に機能して、ひとつの白球を追ってゲームを支え成り立たせている。ゲーム自体にも序盤、中盤、終盤という時系列な展開がある。地域防災においても、日常から災害発生時、災害復旧期、復興期、さらに日常へと時が流れていく中で、個人がすること、身近な地域、行政(例:日常の役所と緊急時の災対)、災害ボランティアセンター(例:日常の社協と緊急時の社協)などがすることなどそれぞれの立場、状況で役割が異なる。地域防災とは、日常時と緊急時は表裏一体であり、「日頃の地域づくりこそ防災」として捉え、日頃から「自助」、「共助」、「公助」がプラットフォームな環境整

備をして、状況に応じて役割を変えまた分担、協働し、必要に応じて融合でき、スクランブルに助け合うことが必須である。



### Profile 永易 英寿(ながやす ひでき)

1973年愛媛県新居浜市生まれ。社会福祉士。日本福祉大学卒業後、新居浜市社会福祉協議会に勤務。2004年8月の集中豪雨と9月の台風21号の際に約70日間、開設した新居浜市社協災害ボランティアセンターでセンター長補佐を務めた。なかでも「ヘドロかき出しツアー」や「Nボラ市民方式」による災害復旧態勢は好評であった。また、新潟中越大地震など全国各地の被災地活動支援を行っている。現在、内閣府防災ボランティア活動検討会委員、新居浜市ボランティア・市民活動センターのコーディネーター、新居浜災害を考える実行委員会 委員長などを務めている。